

市民の希望で生まれた大阪市音楽隊 盛りあげよう、市民の音楽文化

ザ・シンフォニーホールで「Shion」の第149回定期演奏会を聴いてきた。「Shion」は、Osaka Shion Wind Orchestraの愛称で、前身の大阪市音楽団の略称だった“市音”に由来する。今年、創立100年を迎えた日本で最も長い歴史と伝統を誇る交響吹奏楽団である。

定期演奏会では、メニン、クリフ・ウィリアムズ、エリクソンらの吹奏楽曲や、読売日本交響楽団の常任指揮者でもあったスコヴァチェフスキの曲が演奏された。演奏は活力に溢れ、特に感心したのがスコヴァチェフスキの「ミュージック・フォー・ウィンズ」である。管楽器の演奏技法や音色を極め、繊細かつ緊張感あふれるこの現代曲の熱演に演奏後の拍手のなか、指揮者の秋山和慶さんと楽団員が、大成功といった感じで目くばせしあっていたのも印象的だった。

私には、平成20(2008)年、出光ビルにあった大阪市立近代美術館(仮称)心斎橋展示室での展覧会で、「Shion」の前身である大阪市音楽団にコンサートを聞いてもらった思い出がある。飾られた美術作品にあわせて、フランス近代音楽やアメリカのミニマルミュージックが演奏され、本物の美術と音楽がコラボした贅沢な時間だった。肩ひじはらない感じが、本来の大阪の文化のあり方なのだろう。

大阪市音楽団の歴史は『大阪市音楽団60年誌1923-1983』(大阪市教育委員会、1983年)が詳しい。日本の西洋音楽受容は、軍隊が欧化を進めるなかで進められ、大阪では、大阪城に本部がある第四師団の軍楽隊が誕生し、市中でも頻繁に演奏して市民に親しまれた。しかし、第1次世界大戦後の軍縮で各地の軍楽隊の解散が進められ、大阪ではそれを惜しむ声があがった。大阪毎日新聞(1923年3月31日)は、皮肉まじりに次のように報じている。

「昨春から新に管弦団を組織して、今後益々朝に夜に人身融和の器に活用された時僅か5万円の経費節約の途に窮した山梨陸相(注・山梨半造)の頭には音律を聞き別ける理解もなく、大阪からこの美妙的な音を消して仕舞うことになったのである」

音楽を愛する市民の支援もあり、軍楽隊をもとに大阪市が補助金を出して、会員制による大阪市音楽隊が結成された。ちょうど100年前の大正12(1923)年10月31日、大阪市中央公会堂で発会式と記



大正12(1923)年3月31日の発隊式。鈴木師団長の告辞のあと最後の演奏を行った。

念演奏会が開かれた。これが「Shion」誕生の原点である。

音楽隊の活躍はめざましく、大正14(1925)年、大阪放送局(現NHK大阪放送局)が北浜の三越屋上からラジオ放送を開始した日も演奏が放送されている。

しかし設立から10年を経て、市の補助金だけでは運営にも支障をきたしはじめた。

「苦節十年、困窮を忍ぶ悲惨な大阪市音楽隊／われらの大阪市音楽隊がこんな現状である事を知れ」(関西中央新聞)

といった記事も出て、市民や関係者の注意をひき、昭和9(1934)年に大阪市の直営団体となる。大阪は文化芸術に無理解で冷たいという批判が昔からあるが、自前の楽団の所有は日本の自治体で唯一であり、大阪市が繁栄していた“大大阪時代”を象徴する英断であったと言える。

戦後も、クラシックからポップスまで多彩なコンサートを展開し、学校での音楽鑑賞会や、中学校高等学校での吹奏楽講習会など、大阪の音楽文化発展に力を注いできた。中之島公園や天王寺公園の音楽堂でも市民向けの野外コンサートが開かれ、高校野球の入場行進曲の演奏や、大阪万博ではEXPOバンドとしてお祭り広場で儀礼演奏を行っている。昭和57(1982)年には、大阪城公園に新しい音楽堂も建設された。

平成26(2014)年に民営化され、翌年に大阪市音楽団からOsaka Shion Wind Orchestraと改称して現在に至っている。地下鉄の駅でもプログラムのポスターを見るが、意欲的な企画が多く、“大大阪時代”以来の市民の財産、誇りとして、大阪人として援助していきたい。がんばれ! Shion!

※コンサート情報や、市民がサポートする「がんばれ! Shion応援団」については、ホームページ<https://shion.jp>をご参照ください。

筆者プロフィール 橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室(現・大阪中之島美術館)から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の現像―」(創元社)など。